

鈴木先生、ペアレンツキャンプの皆様

秋が深まり、肌寒さが身にしみる気候になってまいりました。
先生方におかれましては、元気でご活躍のことと拝察申し上げます。

先月、3年程に渡る支援を卒業いたしました。
これまでを振り返って、支援当初を思い出すと胸が詰まり苦しくなります。
長男がクラスメイトとのトラブルを理由に「小学校にはもう行かない」と
行き渋りをしたのは小学1年生の4月、GW直前の事でした。

それまで、幼稚園で友達もすぐに出て来て環境の変化に柔軟に
応えられると思っていた私は、目の前で起きている事が理解できず、
連休中に気分転換をして疲れを取ればきっとまた普通に登校
するだろうと考えていました。

しかしその後も長男の登校渋りは続き、校門まで引きするよう
にして連れて行った事もありました。どう説明したら学校に行かなくて
いけない事を理解してくれるだろうか、どう接したら前向きになる
だろうか、何をしたら良いか分からず、周囲に相談しても解決策
は見えてこず、毎朝登校時間を迎えるのが不安で夜も眠れず
必死でした。「学校が怖い」「とにかく学校だけは嫌だ」、
幼稚園に戻りたい」これと言った明確な理由もなく、
私には謎が深まるばかりでした。

「お母さんが一緒なら教室に行ける」という言葉で始まった
母子登校。朝から昼休みまで教室の後ろにイスを置いて座り、
下校時にまた迎えに行く日々でした。

本来いるはずではない母親の存在に対するクラスメートの視線を
つらく感じていました。

毎日ネットや書籍で不登校や心理学について調べても、そこに
長男への解決策は見いだせず、担任やスクールカウンセラーに相談
しても結局私の話を聞いてもらうだけで終わりました。

このまま小学校生活を送るのはまずい、でもどうしたら良いか
もう分からず、2学期に入っても変わらない状況に対し、
切実な思いでペアレンツキャンプへ最初の問い合わせをしました。

水野先生の本を読んで内容に納得するものの、自分と長男に
置き換えるとどこが問題なのか分からなかった私は、
鈴木先生との電話カウンセリングや家庭ノートの添削を重ねる
につれ、その的確なアドバイスに驚いてばかりでした。

私の過干渉・過保護な言動は、長男の事を信用して
いないと思わせるもので、年相応の自立を阻んでいたのです。
今思えば、私は周囲からどう見えるかばかりを気にしていて、
良い母親ならこうするもの、とか、長男をちゃんと育てなきゃ
という思いに囚われて、自分の考えを押し付けてばかり
いたのだと思います。

支援が始まってからは、明確なルールを定めて、ペナルティを
受け入れることも、徐々に私が学校から距離を取るのも、一つ
一つが私にとって試練でした。でも、鈴木先生が毎週の
電話カウンセリングと家庭ノートでサポートして下さるおかげで、

支援を続けるうちに自信をもって対応することができました。

支援を始めて3か月程経った頃、長男は玄関から一人で登校できるようになりました。

長男は今4年生になり、クラブ活動など高学年ならではの活動が始まりました。新しい物事に不安を感じやすい長男は、初めてのクラブ活動の前日に「話せる友達がいなかったらどうしよう」と不安がっていました。当日行き渋ることなく登校しました。帰宅して、活動初日の様子を語る長男はとても誇らしかったです。

また、今年1年生となった次男の就学でもサポートして頂きました。早生まれの次男はとにかくマイペースで、私も先回りしてしまう事が多々ありましたが、鈴木先生に話を聞いて頂けるおかげで、しっかり寄り添うべき時と、少しずつ任せて見守る時と、状況に応じて対応することが出来ました。学校への愚痴や不満は出るものの、『学校は行くもの』という認識が根付き、行き渋ることなく通っています。

「親が学べば子は伸びる！親が変われば子も変わる！」
本当にその通りだと感じました。

まだまだ心配事は絶えません。家庭教育で学んだ事を忘れてはいよいよ頭の中に鈴木先生をイメージして、きっと先生ならこう言うだろうと考えながら、3年前の私に戻ることがたいよう、今後も頑張っています。

一人でも多くの子どもが充実した学校生活を送れるように、
一人でも多くの保護者が心強い気持ちで子育て出来るように、
先生方の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

最後に、金令平先生をはじめペアレンツキャンプの皆様、
お忙しいとは存じますが、どうぞご自愛くださいませ。
また、親の会でお目にかかるのを楽しみにしております。

2020年 11月 10日